

「ソーシャルスキルトレーニングプログラム・モデルプランの作成」

秋山 智之・前川 理沙・井原 和美・佐々木 信

学級集団アセスメントによる学級の分析を行い、ソーシャルスキルトレーニングプログラムのモデルプランを作成する。

はじめに

ソーシャルスキルは「他者との関わりを維持したり、発展させたりするために必要な力」とされている。

綾瀬市の小・中学校では学級集団アセスメント（hyper-QU）を活用し、日常の取り組みや観察と併せて、クラスの実態把握のための分析を行い、児童・生徒が抱える課題の改善や支援のために効果的なSSTPの実践について研究するとともに、SSTPのモデルプランについても研究を進めた。

学級集団アセスメントの分析及びSSTPの実践、モデルプランの検討等について、芝浦工業大学准教授 岡田佳子先生にご指導いただいた。

研究の内容

1 研究の基本方針

(1) 学級集団アセスメントの結果分析

学級集団アセスメント1回目の結果を分析し、学級および個人の現状や課題を把握する。

また、2回目の結果から、学級の改善に向けたさまざまな取り組みの成果を検証する。

(2) SSTPの効果的な実践の探求とモデルプランの作成

学級及び個人の課題改善のためのスキル向上を図り、学級の実態にあわせたSSTPの効果的な実践を探求し、モデルプランを作成する。

2 研究経過

(1) 学級集団アセスメントによる学級及び個人の実態把握と分析

学級集団アセスメントの1回目を実施（5月）し、その結果をもとに、研究員4名の担当学級における学級と個人の实態把握及び改善のための分析を行った。さらに2回目（中1 1月・小1月）の結果から、学級全体および個の変容を読み取り、改善に向けた取り組みの成果を検証した。

(2) SSTPの実践とモデルプランの検討

学級の実態把握と分析から、目標を設定し、改善策を検討した。SSTPは目標に基づいて実践することが大切である。実施の目的を明確化した上で、学級の実態や発達段階に応じてアレンジをすることで、より効果的な実践を目指した。

また、モデルプランの作成の方向性についても議論を重ねた。

(3)授業実践

中学校

《プログラム》みんなで解決し隊

クラスの課題を考え、解決策を個人で考える。その後、グループを作り、解決策の意見交換をする。そして、最善策を決める。

《ねらい》

- ・状況を把握し、自分の意見を持つ。
- ・皆で協力し、問題解決策を考え、その中から結果を見通し最善策を選ぶ。

《アレンジのポイント》

- ・練習問題では、担任がクラスの課題だと思っていたことを掲示する。
- ・生徒がクラス内の課題だと思うことを取り上げる。
- ・生徒が振り返りを書きやすいようにマス目をつける。

《生徒の振り返り》

- ・みんなで協力し、解決方法を決めることができた。
- ・意見を出し合うと、みんな同じことを思っていることが分かった。思っていることが同じなら、すぐ解決できそうに感じた。
- ・自分も含め、みんな無言ということが多く、話すことが少なかった。

《改善点》

- ・振り返りシートの書き方が分かりにくい部分があったので改善した。
- ・グループ編成を考えないと、話し合いにならないグループがあった。

小学校①

《プログラム》G-MANグランプリ

自分だけの体験や経験に目を向け、自己開示する。友だちと話をすることで温かい雰囲気をつくり、自己肯定感を高める。

《ねらい》

- ・自己開示をし、自ら関わろうとする態度を育てる。
- ・友だちの良いところを知り、それを賞賛する良さを学ぶ。
- ・お互いを認め合い高め合うきっかけづくりにする。

《アレンジのポイント》

- ・児童が自己開示をして良かったといえるように反応をよくするアイスブレイクを取り入れた。
- ・教師自らG-MANグランプリを行うことで、安心感をもって取り組めるようにする。また、反応の仕方の練習を行う。

《児童の振り返り》

- ・ほとんどの児童が百点の自己採点をする程、満足感のある活動だった。
- ・相手の良さを知るだけでなく、賞賛する良さを味わうことができていた。
- ・認め合えることで、素直に感情を表している児童が多かった。

《改善点》

- ・活動しない児童が1名と参加はするがやりたがらない児童も1名いた。活動中の声かけや事前のハッピーカードの取り組み方に工夫が必要である。

小学校②

《プログラム》G-MANグランプリ

自分だけの体験や経験に目を向け、自己開示し、友だちと共有することで、自己肯定感を高める。

《ねらい》

- ・自分の体験や経験に自信をもって、自己開示をする。
- ・友だちの話に対して、肯定的に捉え、賞賛できるようにする。
- ・互いに認め合い、温かい雰囲気づくりを行う。

《アレンジのポイント》

- ・子どもたちが話しやすい内容になるようにする。
- ・グループに入れない子がいないように考慮し、できるだけたくさん交流できるようにする。
- ・振り返りカードにもねらいを明記し、常に意識できるようにする。

《児童の振り返り》

- ・子どもたちは友だちに賞賛されたことが嬉しかったようで、またやりたいという子がいた。賞賛される経験が少ない子たちにとっては、満足感を得られたようである。

《改善点》

- ・なるべくグループでの交流を多くできるようにしたために、振り返りを共有する時間の確保が難しくなってしまった。ねらいにもっと迫るために、時間配分が課題であると感じる。

成果と課題

成果

- ・講師より、アセスメント結果から得た情報と日常生活の様子とを組み合わせ、正確な実態把握につなげるために分析の仕方について助言をいただいた。また、そこから見えてくる結果に応じたSSTPや子どもたちへの日々の対応についても教えていただき、実践できた。
- ・SSTPについて、学級の実態にあわせて、プログラムをアレンジすることが必要だと考える。アレンジの方法について話し合い、実践後にもさらによい方法はないかと考えた。

課題

- ・SSTPを実践するための時間の確保が課題である。1時間の授業で成果を期待するのではなく、日頃の授業の中でSSTPのエッセンスを取り入れた授業展開を実践していく必要がある。
- ・アセスメント結果をより有効に活用するためには、日常の丁寧な観察と児童一人ひとりの追跡をすることも大切である。
- ・学級経営の授業公開を実施していないため、客観的な視点で学級経営を捉えられていない。アセスメント結果だけでなく、担任以外の先生からのアドバイスも取り入れて学級改善を図っていけると良い。